旅券のない犬

西村寿行

犬

講談社

旅券のない犬

著者—西村寿行（にしむらじゅこう）

一九八七年七月二三日　第一刷発行

発行者—加藤勝久

発行所—株式会社講談社
東京都文京区音羽二—十二—二十一　郵便番号一一二　電話　東京〇三(九四五)一一一一—大代表

印刷所—大日本印刷株式会社

製本所—黒柳製本株式会社

定価—一〇〇〇円

落丁本・乱丁本は、小社書籍製作部宛にお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。

© Juko Nishimura 1987, Printed in Japan

ISBN4-06-203431-X（0）（文2）

目次

第一章　白い矢――5
第二章　旅券のない旅立ち――18
第三章　リスボンへ――40
第四章　B兵器（バイオ・ウエポン）――55
第五章　殺しへの突入――83
第六章　狼――99
第七章　黄金砦（とりで）――118
第八章　死の谷――143
第九章　邂逅――181
第十章　大脱出――201
第十一章　キャンドル・オペレーション――222

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

旅券のない犬

カバー装画　金森　達
ブックデザイン　安彦勝博

第一章　白い矢

1

アフリカ大陸旅行の基点はだいたいにおいてケニア共和国の首都、ナイロビである。

ケニアに入るには旅券と査証が必要である。査証には三ヵ月間滞在可能な観光、業務査証と七十二時間以内の通過査証がある。

一頭の旅券を持たない犬がいた。

犬には旅券がない。世界中のいかなる国も犬や猫や牛には旅券を給付しない。

だいぶ前にケニアを出発した一頭のカバがいた。カバは水に棲む。草を求めてたまに内陸部に入るがそんなに深くには入らない。だが、そのカバはちがった。内陸部に分け入ってそのまま南下をはじめた。通信社が〈旅カバ〉と命名した。なんでそうなったのかはわからないがそのカバはアフリカ大陸を歩きつづけた。

通信社や新聞社が挙って旅カバの動静を記事にした。○○の町に到着するのは××日の△△時だというふうに予想を出したりした。カバの牙は巨大だから猛獣もめったに襲わない。カバはトコトコと南下をつづけて千何百キロを旅した。

だが、心を有たない人間がいた。ハンターという名のその人間は旅カバを射殺してしまった。

カバがなぜ川を捨てて内陸部を千何百キロもの旅をしたのかはだれにもわからない。

カバは地球の涯をみる気になったのかもしれない。あるいは夫婦喧嘩をしてアフリカ大陸から出て行く気になったのかもしれない。もしくは南アのボタ大統領と会見するつもりだったのかもしれない。アパルトヘイト政策にイチャモンをつけるために。

しかし、旅カバは殺されてしまった。

ケニア政府が旅券を給付しなかったからである。ケニア共和国外務省か出入国管理局か法務局か知らないがケニア共和国スタンプのある旅券を政府は旅カバの首にかけてやるべきであった。

人間は地球を人間の大陸と思い込んでいるがそれは正

しくはない。そこに棲む生きものの大陸である。

旅券を有たない犬の体毛は真白であった。
紀州犬である。
名前は〈十兵衛〉。
牡四歳。
十兵衛はナイロビ川を遡っていた。ケニヤッタ通りに近い日本大使館から十兵衛は脱出して来ていた。日本から赴任したばかりの大使夫妻が殺されて十兵衛には身を寄せる先がなくなったのだった。
十兵衛の体毛は艶を失っていた。
その十兵衛が、足を停めた。

目撃者が二人、いた。二人のヨーロッパ人女性で蛇園の近くにいた。
みたことのない犬種であった。精悍な容貌はシェパードなどの比ではない。バンツー系の若者二人が歩いていた。白い犬が足を停めてその二人の黒人に切れ長の双眸を向けた。ほんのわずかだが時が停止した。白い犬の牙が時を掻き破った。カンナとブーゲンビリアの真紅が路傍を埋めている。それにポインセチアだ。ナイロビでは一年中、そうした花々が咲き乱れている。

人影はすくなかった。
白い犬が疾走したのをみて、婦人二人はブーゲンビリアの木陰に身を潜めた。疾り出す前に白い犬は高鼻であたりの臭いを嗅いでいた。嗅ぎ終わったときには犬は牙を剝き出していた。
攻撃目標はバンツー系の二人の黒人。二人の婦人はそうみた。黒人たちは背を向けて歩いている。白い犬には気づいていない。犬の放つ低い怒号にも気づかないでいる。呼んで教えるわけにはいかなかった。犬の動きは確信に充ちていた。狙撃銃から放たれた弾丸をみた気がして二人の目撃者は身を竦ませた。
犬は白い矢のように風景を割いた。
二人の黒人が犬の怒号に気づいて、振り返った。犬がその一人に襲いかかった。黒人は手を出して犬を抱えるような動きをした。犬は襲いかかった体重で黒人を棒倒しにしていた。黒と白がもつれ合ったとみる間にその間から血が噴いて出た。黒人は喉を咬み裂かれていた。
もう一人の黒人は事態を把握して得物が無いかと周りを見回した。何をみる暇もないうちに仲間の血が路を染めたのをみて、黒人は短距離ランナーとなった。猛烈な勢いで逃げはじめた。黒人の短距離ランナーはしかし、犬には敵わなかった。背後から襲いかかられて横倒しに

倒れた。犬を突き離そうとする腕が咬み裂かれた。もう一本の腕も同じことになった。

喉が咬み裂かれたのをみて、目撃していた婦人の一人が、吐いた。もう一人の婦人は無意識にカメラのシャッターを切りつづけていた。血にまみれて赤くなった犬はナイロビ川方面に向かって疾り消えた。

パトカーが来たのは十数分後であった。ハグル・ビン中尉が指揮を執っていた。ビン中尉は目撃者の白人女性二人をナイロビ警察署に案内した。フィルムはすぐ現像に回された。

ビン中尉は追跡隊に白い犬を追わせていた。

犬が人間を咬むのは珍しいことではない。しかし、小児ならともかく屈強の男二人が一匹の犬に為すすべもなく咬み殺されたというのは、前代未聞だ。しかも二人とも喉を咬み裂かれて頸骨まで咬み砕かれている。凶暴きわまりない狂犬の仕業であった。

ビン中尉は追跡隊に犬の射殺を命じてあった。

テレビ、ラジオでナイロビ市民に警告も発してあった。

凶行の起こったのが二月一日午前九時前。

午前十時二十分。殺人担当のハンティス大尉がビン中尉を訪ねて来た。外務省のアジア担当部長と在ナイロビ日本大使館一等書記官が一緒だった。このときには凶行をスナップした写真が出来上がっていた。

「まちがいなく、十兵衛です」

能見一等書記官が写真をみて、確認した。

能見は東京警視庁から大使館に派遣されて来ている警視であった。十兵衛が咬み殺した二人の黒人も能見は知っていた。

「ただちに、ジュウベエ射殺令の撤回だ、中尉。保護に切り替えだ。急げ」

ハンティス大尉がビン中尉に命じた。

首都ナイロビが沸いた。

日本犬、大使夫妻の仇を討つ！

ＵＰＩがいち早く通信網に載せた。テレビ、新聞が連日のように愛犬の復讐譚を報じた。〈ジュウベエ〉の名はナイロビだけではなくＵＰＩによって全世界の知るところとなった。ＵＰＩはＡＰと並ぶアメリカの二大通信社であった。アフリカ諸国ではともかくとして欧米人には犬好きが多い。しかも、その犬が飼い主夫妻の仇を討った。屈強の犯人二人をもののみごとに屠ったのだ。

テロリストに悩まされている強い国のアメリカ人には、大喝采ものであった。
ケニア共和国は一安心した。
ドウブラ・サリム外務大臣が異例の担当者となって大々的な〈ジュウベエ保護作戦〉が開始された。
着任して間もない刈羽大使夫妻が惨殺された。犯人は大使館付きの運転手、ティティとパニアの二人に絞られていた。殺人現場に指紋を遺したまま姿を晦ませていた。警察は国の名誉にかけてティティとパニアを追っている最中だった。
ジュウベエがティティとパニアを追跡し、発見して、大使夫妻の仇を討った。無念を晴らした。日本国民の感情はその仇討ちで鎮静化するはずであった。
その上にジュウベエを保護して丁寧に日本に送り返せば大使夫妻殺害という重大な失点は埋められることになる。

2

二月九日。
UPI記者、ラッセル・バコールが大使館に能見一等書記官を訪ねて来た。

「情報はありませんか？」
バコール記者は三十五歳。働き盛りであった。国籍はアメリカだが生まれたのはナイロビ。アメリカの大学で生物生態学を専攻して博士号をとってから通信社入りをしたので、変わり者といわれていた。
「目下のところは……」
能見の声には力がなかった。
刈羽正道大使と道子夫妻の殺されたのが、一月二十七日。たまたま、大使館には夫妻しかいなかった。凶行のあったのが深夜。大使は頭部を鈍器で殴打されて殺されていた。道子は床に全裸で転がっていた。死因は紐による絞殺。輪姦されていた。血液型のちがう精液が二種類、検出された。大使を殺し、妻を犯して愉しんだのちに絞め殺したものと思われた。室内は物色されていた。
凶行は翌朝になって発見された。能見が駆けつけたのは昼過ぎであった。
十兵衛が昂奮していた。明らかにつねとはちがう昂ぶりであった。十兵衛は繋がれていた。鎖に繋がれていて飼い主である道子の悲鳴を聴いたものと思われた。
犬には飼い主の死を理解する能力がある。
一月二十九日、十兵衛は行方を絶った。召使いが散歩

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.

に連れ出して逃げられたのだった。戻るものと能見は思った。日本犬は帰巣本能が強い犬種として知られている。

行方を絶って四日目に十兵衛は蛇園（スネークパーク）の近くでティティとパニアを発見して、夫妻の復讐をした。復讐のために十兵衛は大使館邸を出たのだと、マスコミは書きたてた。ということは十兵衛はティティとパニアの犯行と知っていたことになる。

能見はあの日の十兵衛の異様な昂ぶりを思い出した。うなずけるものがあった。

「しかし、わたしの考えはまちがっていたかもしれない」

能見はバコール記者をみつめた。

「まちがっていたとは、どういうことです？」

バコール記者はコーヒーには手をつけなかった。

「犬には飼い主の〈死〉を理解する能力があります。あなたの専門分野です……」

「ええ」

バコールはうなずいた。

飼い主の〈死〉だけではなく、仲間の死も犬は理解する。生命が永遠に去ってそこにあるのは亡骸（なきがら）だとわかる。一緒に遊んでいた仲間が車にはねられて死んだ。それをみた仲間の犬がよろめきながら吐いたのを、バコールは目撃したことがある。つづいてバコールは驚愕（きょうがく）した。褐色（かっしょく）であった体毛が友の死をみて急速に脱色し、草の葉色に青ざめたのだった。たしかに犬は〈死〉の意味を理解している。

「十兵衛は大使館に戻るとばかり、わたしは、思っていました……」

復讐を遂げたのが一日で今日が九日。

サリム外務大臣の担当でビン中尉がジュウベエ保護作戦の総指揮をとっている。他の警官も白い犬に目を炯（ひかる）らせている。市民もだ。しかし、白い犬をみたとの情報はどこからも入らない。体毛が真白で耳が立っている紀州犬はアフリカでは目立つ存在だ。ナイロビにいるのならかならず、だれかの目に触れる。

――十兵衛はナイロビを出た。

能見はそう思いはじめた。

十兵衛はティティとパニアが夫妻を殺したことを知っていた。しかし、ティティとパニアを追跡するために脱出したのではなかった。仇討ちのための脱出は人間の思考形態であって犬にそれを課すのは、いささか気が重い。

十兵衛は主のいなくなった大使館邸を捨てた。十兵衛

には無意味となった大使館邸であった。十兵衛は目的を持って出た。その目的に向かう途中で十兵衛は偶然にティティとパニアの臭いを嗅いだ。十兵衛は夫妻を殺したティティとパニアに憎悪を剝き出しにした。

紀州犬という犬種は獲物に向かわせたら精悍無比となる。他の犬種で追随する犬種は無いとされていた。ただし、人間は襲わない。襲った例がない。あるとしたら他の犬種の血が混じっている場合だけだとまでいわれていた。

しかし、ひとたび、紀州犬が人間を襲ったら、どうなるのか。

ティティとパニアがよい例を示している。拳銃か刃物がなければ大の男といえども、十兵衛の敵ではなくなる。

「ですが、そのジュウベエの目的というのは？」

バコールはおびえた眸になった。

「郷里ではあるまいかと……」

「郷里！」

「もちろん、発想そのもの自体が……」

能見はコーヒーカップに視線を落とした。

飼い主の大使夫妻は死んだ。十兵衛には主のいないナイロビは無意味な大地となった。日本には刈羽夫妻の一粒種の哲人がいる。たしか大学を出たばかりだ。十兵衛を育てたのは哲人であった。たがいに良き友であった。東京に独り残る忙しい大学生の哲人に面倒をみさせるわけにはいかないから十兵衛をアフリカに連れて来たと、刈羽はそういった。

「ナイロビから東京までは、どのくらいの距離だと思いますか？」

バコールの声は低かった。

「直線にして、一万数千キロだと……」

能見は笑いだした。

十兵衛は航空便でナイロビに入っている。

能見は笑いをひそめた。

十兵衛は空港には向かうまい。航空機で帰国する発想は犬にはない。もっとも、その発想があってくれれば空港で十兵衛を保護できる。十兵衛はナイロビを捨てた。大使館にも戻らないし情報もいっさいないのは、ナイロビを捨てた証拠だ。捨てても、十兵衛に行くあてはない。いや、あてはある。東京の自宅だ。

だが、この大地をアフリカ大陸だとは十兵衛は知らない。故郷が遠いとは本能で悟っているかもしれない。しかし、いかな本能といえども全貌を把握できるわけはない。

陸つづきに北上する叡智に導かれたとする。ケニアのつぎはエチオピアだ。スーダンに入り、エジプトに出る。そこでスエズ運河を渡らねばならない。

ヨルダン、イラク、イラン、アフガニスタン、パキスタン、インド、中国、朝鮮半島とかりに最短距離を辿ったところで待ち受けているのは日本海だ。絶望の距離といえる。

本能とはいえ全容を把握するのは不可能だ。だが、九分九厘、十兵衛はその絶望の旅に就いたにちがいない。全貌を摑むことのできない、それでも強烈な本能に衝き動かされて、十兵衛は旅に就いたのだ。

――まさか！

能見は空間に視線を投げた。

十兵衛が戻らない。一片の情報もない。ナイロビの市民は十兵衛を英雄として暖かく迎えようとしている。なのに情報の一片もないのはナイロビを出た証拠だと、能見はぼんやりと思っていた。郷里を目指しているのかと、漠然と考えていた。その漠然の思いをバコール記者に話して、自分で笑いだした。正気の沙汰とは思えない発想にみえて来たからだ。

しかし、その笑いはじきに凍りついた。

能見は涯の知れない砂漠を本能に導かれるままに北上する十兵衛の姿を思い描いた。

エチオピア、スーダン、エジプトは砂漠だらけだ。行けども砂漠だ。

「まさか――」

能見はバコールをみた。

自分の発想に能見は悪寒をおぼえていた。バコールに否定して欲しかった。

バコールはしばらくは黙っていた。

「タバコを喫っても、かまいませんか」

バコールは訊いた。

「ええ。しかし……」

来たときから、バコールの口調は沈んでいた。双眸におびえに似たものがあった。能見はしだいに不安になっていた。十兵衛の記事を真っ先に通信網に載せたのはバコールであった。

十兵衛がどうなったところで能見には責任はない。しかし、責任の問題ではなかった。能見も犬は好きであった。十兵衛とは顔なじみだ。その十兵衛が大使夫妻の死を知って、ナイロビを捨てた。十兵衛は友の哲人のいる郷里に向かった。本能は十兵衛に帰巣を告げるがその本能にも危険予知能力までは含まれてはいない。十兵衛は自身に迫る死の影をみることなくしてナイロビを出た。

――なぜ、すぐに本国に送り返してやらなかったのか。

悪寒はそこから出ていた。

「ジュウベエは、北上はしないと思います」

「北上しない？　どういうことですか、それは」

能見の声が高くなっていた。

「砂漠に向かえば、ジュウベエはまちがいなく死にます。これは、犬や猫の感覚が現在、本能とされる遺伝子とまったく縁のないところから生じているからです。そのことで、わたしは、あなたを訪ねたのです」

わずかに、バコールは青ざめていた。

3

〈遺伝子プログラム〉

響きがよくて通りのよいことばである。

たいていの生物の遺伝子は二本鎖のＤＮＡである。ＲＮＡというのもある。塩基でできている。ＤＮＡは塩基のことばを持っている。それを解明すれば遺伝子が蛋白を造る構造がわかる。

遺伝子全盛である。

すべての生物は生、長、老、死のすべてを遺伝子プログラムによって規制されている。脳も遺伝子によって造られているからその人の思考形態も遺伝子が支配している。

そのていどのことはバコールも知っている。

ただしである。ここに男と女がいるとする。恋をしたとする。だが、その恋の正体は科学では捕捉できない。男女の間に何かが存在するとの証明は不可能である。

不可能であることの証明は幾らもある。

カリフォルニア州のアンダーソンからオクラホマ州のゲージまで二千四百キロの旅をした〈シュガー〉という名のペルシャ猫がいる。シュガーは飼い主の転任先を探す旅に出たのである。シュガーはロッキー山脈を越えている。十三ヵ月を費やしてシュガーは飼い主の家に辿り着いている。旅先で捨てられた猫が家に戻ったのではない。そんな話なら枚挙に遑がない。シュガーはそのまったく逆のことをやってのけたのだった。

似たような例が犬や鳩で山ほどもある。

とくに犬に例が多い。ロッキー山脈を越えた犬、ネバダ砂漠を千四百キロも四肢を血まみれにして渡った犬、英仏海峡を越えた犬、ｅｔｃ――。

遺伝子プログラム説はそうした例の前には無力となる。人と動物の織りなす愛が生んだ奇蹟だと、動物愛好

家はいう。はたしてそうなのかどうかは、結局のところ、だれにもわからない。たがいの愛があるのならシュガーはおいてけぼりにはされなかったはずである。となると、一方的なものということになる。人間はシュガーのような例を前にすると、とまどう。どう判断してよいのかわからなくなって超能力とか愛情の奇蹟とか帰巣本能などに逃げ込む。遺伝子プログラムを以てしても太刀打ちできないのだから、逃げるしかないことになる。

もっとも、たいていの犬や猫はそんな挙には出ない。人に擦り寄ったり尾を振ったりして新しい飼い主を求める。うまくいかなければのら猫かのら犬だ。ま、なんとか生きて、はいける。人間を驚嘆させるために気が遠くなるような旅に出てやろうなどとは、企まない。

旅に出て人間を畏怖させ怯えさせる犬や猫はごく少数である。少数ではあるが存在することははっきりしている。

インディアナ州からオレゴン州まで三千キロを旅して家に戻ったボビーという牧羊犬がいた。六ヵ月におよぶ旅だった。ある記者がボビーの全行程の追跡調査をはじめた。あちらこちらで一時的に飼われるとかそうした世話になっての旅だと、記者は思ったのだった。だが、記者は仰天した。ボビーはどこにも道草を喰わずにほぼ最短距離を辿って戻っていたことを記者は突きとめたのだった。

「わたしはその記者の跡を継ぎたいのです」

バコールは能見をみつめた。

「跡を継ぐとおっしゃると？」

バコールは生物生態学を専攻している。バコールの訪ねて来た意味がようやく能見にはわかりかけていた。

バコールはジュウベエを追跡するために日本大使館を訪ねたのだった。バコールは幾つかの動物の例を能見に話した。

アメリカとソビエトが鎬を削っている超能力研究には生物体からのエネルギーの取り出し、転送、遠隔会話などがある。そうしたものが最終兵器となることはいまでは常識である。たとえば、イモリが八キロの旅をして真一文字に古巣の池に戻った例がある。嶮しい山脈を越えてだ。どうしてそのようなことが可能なのか。旅を克服させるエネルギーはどうなっているのか、方角感覚はどうなっているのか、古巣に向かって行動を起こさせるものは何か――超能力研究の基礎はそこにある。

ペルシャ猫のシュガーに何が起こったのか。牧羊犬のボビーに何が起こったのか。

それらが解ければ、人間には不可解としかいえないも

う一つの能力の謎が解明される。
もちろん、バコールは超能力に挑むためにジュウベエを追跡するのではない。犬のもう一つの能力を自分の目でみて自分を納得させるための追跡であった。
――ジュウベエは日本に向かった。
ほぼ確信に近いものをバコールは抱いていた。
ジュウベエは大使夫妻の仇を討った。ティティとパニアを咬み殺した。夫妻殺害犯人を追跡するための脱出ではあるまいと、能見は推測する。バコールも同感であった。犯人に出遇ったのは偶然にちがいない。
ジュウベエは日本に戻るために大使館を脱出した。脱出して今日で十二日になる。ナイロビにはいないと断ぜざるを得ない。ジュウベエは日本に向かって疾走を開始した。
牧羊犬のボビーは三千キロのかなたにわが家を見据えて、真一文字に疾りはじめた。ジュウベエの向かう日本はコースの最短距離を辿るとしても一万数千キロはある。ボビーがそうであったようにジュウベエも故国に焦点を定めての出立にちがいない。
だとしたら、ジュウベエは北に針路をとったことになる。ふつうは、そう考えられる。しかし、バコールは、それは採らない。エチオピア、スーダン、エジプトには死の砂漠が横たわっている。踏み込んだら、ジュウベエは確実に死ぬ。
ペルシャ猫のシュガーは行ったことのない飼い主の転任地を捜し当てている。二千四百キロを十三ヵ月間で乗り切っている。ロッキー山脈を越えてだ。不屈の魂が必要であることはいうまでもない。しかし、それをはるかに上回る超能力が必要であった。シュガーは知っていたのだ。自分を棄てた裏切者の飼い主がどこに向かったかを、シュガーはみていたのだ。だから、シュガーは裏切者をどやしつけるべく旅に出たのだ。
――同じ眸が、ジュウベエには備わっている。
ジュウベエはさながら衛星から俯瞰するようにアフリカ大陸をみている。ケニアの北に拡がる不毛の砂漠をみたはずだ。ジュウベエは死ぬためにナイロビを出たのではない。生きて故国に帰れるとみてとったからこそ、ジュウベエはナイロビを疾り出たのだ。
シュガーは裏切者をどやしつけるべく妖しげな旅に出た。ジュウベエは故国を脳裡に描いて旅に出た。陰と陽のちがいはあるが、見えないものを視る能力は同じだ。
――ジュウベエはかならず日本に戻る。
バコールはそう思っていた。
ジュウベエがどこに向かうかの予測は、バコールにも

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.